

国際力動的的心理療法学会

第 22 回年次大会

大会テーマ

危機介入—心理療法と中国哲学—

日時

2016 年 11 月 3 日（祝・木）— 6 日（日）

会場

東京大学駒場キャンパス 18 号館・21KOMCEE (11月3,5,6日)

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京工業大学（田町キャンパス）キャンパスイノベーションセンター (11月4日)

〒108-0023 東京都港区芝浦 3-3-6

大会会長

橋本 和典 (国際基督教大学准教授)

大会副会長

中島 隆博 (東京大学東洋文化研究所教授)

主催

国際力動的的心理療法学会 (IADP)

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター (UTCP)

上廣共生哲学寄付研究部門



第 22 回年次大会 大会会長挨拶

臨床家よ、クライシスワーカーたれ



昨年の第 21 回年次大会は、熊本大学医学部の宇佐美先生のご尽力により、熊本で初めての開催をした。そこで、精神科専門看護師の仕事の本質に触れた。危機介入（Crisis intervention）である。私の専門は、自殺未遂、自傷、非社会的、反社会的行為等の自己破壊的な行動化を特徴とする困難患者（Difficult patients）の心理療法である。その仕事の始まりと、心理療法の随時のところに危機介入がある。また、奇しくも、昨年の熊本の地で今年 4 月 14 日の震度 7, 6 弱の 2 度の大地震を皮切りに、現代日本が経験したことのない多くの余震が 2 ヶ月近く続いている。こうしたメガ災害、さらには、現代のテロや、大小さまざまな組織の事故ののちに、大規模トラウマが不測の衝撃として人々に広がり、その後の累積ストレスから「普通」の人々も容易に困難患者反応を示すことはあまり知られていない。トラウマはそれほどに認識にくい性質があり、隠れた PTSD の重荷を抱えながら、知らぬ間に破壊・自己破壊の渦にはまりこむ東北の大人や子どもたちが多くいる。ここにも随時の危機介入からの心理療法が必要であるが、これができる専門家はほんの一握りである。この重い現実こそが、本学会が、東日本大震災のバックアップを続けている理由であり、「危機介入—心理療法」をテーマとした強い想いである。

また、私が代表を務める福島県の PTSD 対応センターで、最初に協働の手を挙げてくれたのが、今回副会長をお願いした UTCP（東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属 共生のための国際哲学研究センター）の中島隆博先生である。その輪は広がり、同じ UTCP の石井剛先生には、四川大地震

の対応にあたった中国の専門家チームとつないでいただいた。その一人が、中山大学（広州）の李樺教授であり、現在、日本と同じく自己破壊的問題が目立つ学生への危機介入からのカウンセリング・心理療法専門家を養成するプロジェクトが、この縁を機会に開始されている。IADP の今大会にも参加いただく。彼女の原点も中国哲学である。孔子、孟子、荀子、老子、莊子。彼らを含む諸子百家を生んだ中国の春秋、それに続く戦国時代は、宗教の意味が薄まり、経済と軍事の強化のもと、国が国を滅ぼすことの壁も低くなり、子が父を、臣下が君主を殺すことが横行する渾沌とした時代だったという。そのままに、現代社会との同型性を連想させるが、今こそ、この中国の古典思想と哲学から、人間性の喪失、さらには孤立と破壊の現代危機に向き合う歴史的叡智を取り出す意味が大きくあると考えている。これが、UTCIP（梶谷真司センター長）との共催を決めた理由である。

現代のメガ災害危機、さらにグローバル社会と資本主義の暴走による地域、家族の崩壊危機は待ったなしである。臨床家よ、クライシスワーカーたれ。危機介入の仕事に、目の前の人の心の生き死にに向き合う臨床センスを磨き、その底支えともなりうる太く深い中国哲学に触れる豊かな 4 日間にしたい。危機は、その漢字の表すままであるが、ここまでの対処能力を超える「危」陰と、それを超えて発達を果たす「機」会が内在している。職種、学派、専門を越えて、共に、危機に生き、危機を超える知識、態度、技術を磨いていこう。

第 22 回年次大会大会会長
橋本 和典, Ph.D. CGP
（国際基督教大学准教授）

大会会長プロフィール

福島県生まれ。博士（教育学） 心理療法家（資格：臨床心理士・全米集団精神療学会公認集団精神療法師）
【専門】精神分析的心理療法 集団精神療法 青年期困難患者の心理療法技法 危機介入と組織開発
【略歴】国際基督教大学教養学部准教授・大学院臨床心理学専修主任 IADP 事務局長 2013 年 9 月に、災害 PTSD の予防とトリートメントのための福島復興心理・教育臨床センターを福島県郡山市に設置し、代表を務める
【主著】『青年期退行性困難患者における自己破壊性脱却機序』（学位論文）「アイデンティティ教育」「人格障害の集団精神療法」「男性の成熟性—集団同一性から自我同一性」など

国際力動的心理療学会 理事長挨拶

危機介入

精神分析、心理療法は不安に対処するものなのだろうか。哲学はどうだろうか。いずれもその本質は危機と対峙するところにあるのではないだろうか。本学会今大会に、哲学そして何より中国哲学との出会いを求めた理事長としての思いはここにある。

阪神—淡路、東日本大震災、そしてまたもや不測の衝撃をもたらした熊本地震、われわれはどこまで危機に対応できているのか。他方、日常生活においては引きこもりやうつ蔓延化、家族機能の低下に伴う虐待、学校や組織におけるスケープゴート（いじめ）は深刻化の一途をたどっている。薬を始めカウンセリングやソーシャルスキル、ソーシャルサポートと、不安への対処は多様に展開されているが、本質が外されているのではないかと問う必要があろう。個人の自己破壊行動に介入する中国の哲学者が、カウンセリング活動の展開を極めて積極的に押し進めている現場に、昨年参画した。不安への対処とは異なる「今ここにある危機に向き合い、対処する」ということには、日本社会よりも遥かに現実感があった。不安には目を向けるものの、死の脅威にある危機からの回避にわれわれは馴染み過ぎていると私には思える。日常臨床と東日本—熊本と続く大震災臨床の現実における私の実感である。

言うまでもなく精神分析や心理療法は臨床の仕事の中に本来の価値がある。臨床の原点は死の危機に臨むものであるから、その仕事の本質は危機にあるに違いない。ソクラテスの毒盃、戦国時代に諸侯を巡った孔子、渾沌を説いた荘子に思いを馳せるなら、哲学が危機に挑戦する知の集積であることは言うに及ぶまい。

エネルギーは粒と波によって波及することを物理学は明らかにしている。破壊のエネルギーも然りである。われわれ現代人の世界は今や破壊の波に晒されている。理想の論議に託すのみでは波に吞まれてしまうのが危機である。哲学は社会の波に

強い。精神分析は社会の粒、個人の力学に強い。システムズ理論はシステム間の力学に強い。今こそここにある世界の危機、そしてそのうねりの中で翻弄されている個人の危機、この事態に破壊から生産へのエネルギー転換の創造的力学を追究するのが、われわれ精神分析的心理療法を基軸とした学際国際学会 IADP のミッションである。

昨年の学会大会を豊かに開いていただいたその地が揺れ、会場であった熊本大学の建物が破壊のエネルギーを諸に受けてしまった。そこにある危機を超えるリーダーシップを担って熊本から、また東日本大震災が残したままの PTSD、放射能被曝の脅威に立ち向かっている宮城、福島から、9.11 を経験したニューヨークから、そして中国からはアクションする哲学者たちが本学会 22 回大会に集う。危機の時代故の危機臨床そして日常臨床、さらに危機の大波に一步も引かない哲学のパワーを東京大学駒場キャンパスに集結させよう。危機を創造に変える力学を分かち合って、今と未来を変えるために。

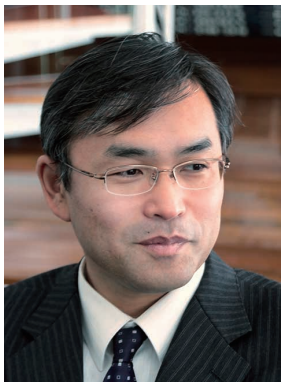
国際力動的心理療学会理事長
小谷 英文, Ph.D., CGP
（PAS 心理教育研究所理事長）



理事長プロフィール

1948 年広島県広島市生まれ 博士（心理学）国際集団精神療法師（USA;CGP）
【専門】精神分析的心理療法 集団精神療法 困難患者心理力動／技法
【略歴】広島大学助手、アデルファイ大学高等臨床心理学研究所客員研究員、New York Univ. Post-Graduate Medical School 集団精神療法過程修了、広島大学助教授；国際基督教大学教授、同教育学科学科長、同教育学研究科科長、同高等臨床心理学研究所創立所長、同名誉教授；日本集団精神療学会元常任理事、国際集団精神療法集団過程学会元理事、集団分析的心理療法国際協会創立教授
現 PAS 心理教育研究所 創立理事長
【主著】『Creating Safe Space through Individual and Group Psychotherapy』『現代心理療法入門』『ダイナミック・コーチング』『ガイダンスとカウンセリング』『集団精神療法の進歩』

第 22 回年次大会 大会副会長挨拶



中国哲学において、人と人との間にあるものとして、心はつねに重要な場所でした。心は、誰かの物理的な境界の中に閉じ込められたものではありません。それは、人が誰かに関わるときにはじめて立ち現れてくるものです。しかもその関係は、抽象的なものにはとどまらず、必ず身体的で言語的なものです。

心に基づく学問は近世になると心学と呼ばれ、日本にも大きな影響を及ぼしてきました。心学の中でもとりわけ陽明学は、その後、近代においてその役割がさらに大きくなり、日本さらには東アジア全般において、心に関するアプローチの一つの類型を示していきました。それは「誠」や「誠意」の強調に典型的です。近代的な内面を有した個人を作り上げてゆくのに、ある程度貢献したのでしょう。

しかし、近代に光と影の両方がつきまとうように、心学の利用にも光と影があります。戦争や災害のような、わたしたちの通常の心のキャパシティを越えた事態に直面した後に、ただただ心の強化だけでは、かえって心を崩しかねません。

おそらく必要なことは、心学以前の中国哲学の知恵も回復することだと思われます。それは、身体的で言語的な所作を通して、人が誰かに関わることによって、お互いの心が変化し、さらにはわたしたちの世界のあり方の変容までも展望することです。

典型的なものは、『莊子』の「物化」（他のものに化する）の思想で、夢に胡蝶となるという句を耳にしたこともあるのではないのでしょうか。それは儒家にも強い影響を与え、性という本質そのものが変化する可能性まで言及されました。考えてみると、それらは戦争と災害の時代に編み出されてきた思想ですので、今日にも示唆を与えることが多いでしょう。

今回の大会では、心理療法と中国哲学の対話が大きなテーマとなっています。そのために、この大会はIADPとUTCP（共生のための国際哲学研究センター）との共催となりました。UTCPはこれまで国際的な研究のネットワークを作りながら、共生について考えてきたセンターです。この対話を通じて、近代を射貫きながら、危機の時代の心に関する想像力を新たなものにできればと念じております。

第 22 回年次大会大会副会長
中島 隆博, Ph.D.
(東京大学東洋文化研究所教授)

大会副会長プロフィール

1964 年高知県生まれ 博士 (学術)

【専門】中国哲学、比較哲学

【略歴】東京大学文学部助手 立命館大学文学部専任講師・助教授 東京大学大学院総合文化研究科准教授 現在東京大学東洋文化研究所教授 バリ第 7 大学客員教授 ハーヴァード大学イエンチン研究所客員学者 バリ第 8 大学客員教授 ニューヨーク大学客員教授 エアランゲン大学IKGF 客員学者 プリンストン大学客員教授 UTCP 委員

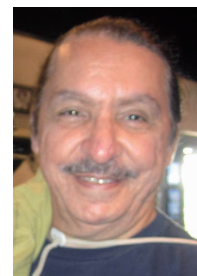
【主著】『コスモロギア—天、化、時』『悪の哲学—中国哲学の想像力』『共生のプラクシス—国家と宗教』『莊子 鶏となって時を告げよ』など

ゲスト・ファカルティ



セス・アロンソン, Psy.D., CGP, FAGPA

9.11 における子どもや青年の PTSD 対処の指揮をとる。代表的な著書『Group Treatment of Adolescents in Context』（Saul Scheidlinger, Fady Hajal と編著）。ウィリアム・アランソン・ホワイ研究所（ニューヨーク）フェロー／ファカルティ／トレーニング・スーパーバイジング・アナリスト、マンハッタン精神分析研究所ファカルティ・スーパーヴァイザー、ノースウェスト精神分析センター（シアトル・ポートランド）ファカルティ、ロングアイランド大学客員教授。



ラルフ・モーラ, Ph.D., MSS, CAIA

米海兵隊の PTSD 治療のエキスパート。アデルファイ大学高等心理学研究所にて学位取得後、アメリカ、ヨーロッパ、日本等において臨床活動を行ってきた。現在、個人開業、臨床心理士。

スペシャル・ファカルティ



吉松 和哉, M.D.

東京大学医学部医学科卒業。医学博士。信州大学医学部精神医学教室教授、大正大学大学院臨床心理学専攻教授を経て、現在、式場病院特別診療顧問。日本集団精神療法学会元理事長。日本精神病理学会元理事、日本社会精神医学会元理事、日本精神分析学会元運営委員。



北西 憲二, M.D.

1970 年東京慈恵会医科大学卒業。1972 年から 1974 年までスイス・パーゼル大学精神科・うつ病研究部門に留学。1979 年東京慈恵会医科大学第三病院精神神経科科長(森田療法室に勤務、入院森田療法を主として行う)。1989 年東京慈恵会医科大学 精神医学教室助教授。1995 年 成増厚生病院 副院長を経て、1996 年森田療法研究所・北西クリニックを開設し現在に至る。



牛島 定信, M.D.

九州大学医学部卒業。国立肥前療養所医長、福岡大学医学部教授、東京慈恵会医科大学教授を経て、三田精神療法研究所所長。日本精神分析学会元会長、日本森田療法学会元理事長、日本サイコセラピー学会前理事長、日本児童青年精神医学会元理事長他。



李 樺, Ph.D.

中山大学（広州、中華人民共和国）哲学学科教授。中山大学心理健康教育カウンセリングセンターの主任。2008 年の四川大地震（汶川地震）後に、子どもと青年を対象に心の復興活動を展開する。自殺未遂する青年の危機介入が専門でもある。

中国教育部（文部科学省に相当）の普通高等教育 大学生心理健康教育専門家指導委員会や、中国心理衛生協会大学生心理カウンセリング専門委員会の委員も務める。主な著書は、「愛と生の悩み—大学生心理カウンセリング事例研究」（広東人民出版社）、「心の成長」（中山大学出版社）、「もしも太陽が許すなら 学生、学業と生命」（高等教育出版社）など。

第 22 回年次大会 大会スケジュール

2016 年 11 月 3 日（祝・木）：大会 1 日目 会場：東京大学駒場キャンパス 18 号館 1 階ホール		
10:00 10:15	オープニング	
10:15	提言：不測の衝撃に向けて オーガナイザー：小谷 英文（IADP 理事長・PAS 心理教育研究所） 提言：足立 智昭（宮城：ライオンズクラブ心の復興プロジェクト「震災復興心理・教育臨床センター」代表） 宇佐美 しおり（熊本：日本専門看護師(CNS) 協議会 代表） 橋本 和典（福島：福島震災復興心理・教育臨床センター 所長） 高橋 教朗（熊本：むさしヶ丘クリニック 院長） 司会：中島 隆博（大会副会長・東京大学東洋文化研究所）	
11:45 11:45	大会会長講演 「危機介入の本質－災害・困難患者心理療法」 講演：橋本 和典（大会会長・国際基督教大学） 司会：能 幸夫（PAS 心理教育研究所・湘南病院相談室）	
13:00 13:00 14:00	昼食	
14:00	【大会基調講演・シンポジウム「危機介入－心理療法と中国哲学」】 司会：セス・アロンソン（ウィリアム・アランソン・ホワイト研究所） 大会基調講演「Crisis! Whose? 危機！誰の？」 講演：小谷 英文（IADP 理事長・PAS 心理教育研究所）	
15:15 15:15 15:45 15:45	休憩	
15:45	シンポジウム 哲学者からのリプライ 中島 隆博（大会副会長・東京大学東洋文化研究所） 中国から 李 樺（中山大学） 米国とイスラエルから セス・アロンソン（ウィリアム・アランソン・ホワイト研究所）	
18:15		

2016 年 11 月 4 日（金）：大会 2 日目 会場：東京工業大学キャンパスイノベーションセンター		
9:30	対談：「渾沌と神経症－中国の知恵・日本の知恵－」（市民公開） 対談：中島 隆博（大会副会長・東京大学東洋文化研究所） 北西 憲二（森田療法研究所）	
11:30 11:30 12:30	昼食	
12:30	ワークショップ「現代の危機と向かい合う」	
15:30 15:45	専門家向けワークショップ ※ワークショップの詳細は、8 ページを参照のこと	アゴラ －災害PTSD を越える心理療法コミュニティ－ （専門家＆市民向け） ※ 詳細は、9 ページを参照のこと
16:15	全体グループ	
16:15 16:20	クロージング	

2016 年 11 月 5 日（土）：大会 3 日目 会場：東京大学駒場キャンパス 21KOMCEE・18 号館 1 階ホール	
9:30	事例研究発表 ※ 研究発表の規定については、12 ページを参照のこと
11:30 11:30 12:45	昼食／理事会
12:45	訓練ワークショップ ※ ワークショップの詳細は 10, 11 ページを参照のこと
15:45 16:00 17:00	総会 学会員はご参加ください
17:15	Edward Pinney 記念講演 「危機介入」 講演：ラルフ・モーラ（個人開業） 司会：足立 智昭（宮城学院女子大学）・平野 幹雄（東北文化学園大学）
18:45 19:00	懇親会 会場：駒場キャンパス 18 号館内オープンスペース（4 階）
21:00	

2016 年 11 月 6 日（日）：大会 4 日目 会場：東京大学駒場キャンパス 21KOMCEE・18 号館 1 階ホール	
10:00	事例スーパーヴィジョン スーパーヴァイザー： セス・アロンソン（ウィリアム・アランソン・ホワイト研究所）／ラルフ・モーラ（個人開業）／ 吉松 和哉（式場病院）／牛島 定信（三田精神療法研究所）／ 能 幸夫（PAS 心理教育研究所・湘南病院相談室）／橋本 和典（大会会長・国際基督教大学） ※ 事例発表の規定については、12 ページを参照のこと
12:00 12:00 13:00	昼食
13:00	全体ケースセミナー コンダクター：小谷 英文（IADP 理事長・PAS 心理教育研究所）
15:00 15:00	クロージング
15:15	

ワークショップ「現代の危機と向かい合う」(2日目)

専門家向けワークショップ

精神看護における抑うつとトラウマへの介入理論と技法ー卓越した看護実践のためにー

講師 宇佐美 しおり(熊本大学大学院生命科学研究部)
小谷 英文(IADP 理事長・PAS 心理教育研究所)

【目的】 近年、総合病院においては、在院日数が短くなり、悪性腫瘍、血液疾患、脳血管性疾患、心疾患を持ちながらも早期に退院し地域で生活をする患者が増え、また精神科病院においてはうつ病とともに過去のトラウマを抱えながら闘病生活を送る患者が増えてきている。今回、身体疾患を持ちうつ病や不安障害を持つ患者、気分障害で多くのトラウマを有する患者に対する精神看護の介入技法、特にオレム－アンダーウッドのセルフケア理論と PAS 理論(精神分析的システムズアプローチ)を用いた介入に焦点を当て、患者のセルフケアや回復をどう促進していけるのか、について検討を行うこととした。

【内容】 セルフケアに関する理論と PAS 理論を用いた介入技法を事例、演習を通じてトレーニングする。

【形式】 講義、事例検討、ロールプレイ

【対象】 精神看護に従事するもしくは関心のある看護師、看護管理者、精神看護専門看護師(CNS)を対象とする。

災害急性期から中期の子どものアセスメントと介入

講師 足立 智昭(宮城学院女子大学発達科学研究所)

本ワークショップにおいては、大規模災害の発生から2か月の急性期、およびそれ以降のおよそ1年間の災害中期の子どものアセスメントの視点について解説し、災害急性期以降の子どもへの介入のあり方について具体的に紹介する。一つは、一人ひとりの子どもを対象とする遊戯療法、もう一つは、集団を対象とする遊戯療法である。これらの遊戯療法は、東日本大震災において実際に被災地で活躍した佐藤葉子氏、および大原慎氏によってワークショップ形式で紹介される。災害発生後のトラウマを抱えた子どもの支援に関心のある方を対象としたい。

【対象】 臨床発達心理士、臨床心理士、保育士、教員、ソーシャルワーカー

うずくまった虎、潜む龍、集団精神療法における青年との作業

講師 セス・アロンソン(ウィリアム・アランソン・ホワイト研究所)

青年期は、生物学的にも心理学的にも大きな変化の時期です。青年期は、家族と別れ、新しい愛着を形成し、認知的変化と情緒的变化の折り合いをつけ、アイデンティティを練り上げることを学ばなければなりません。グループプロセスは青年たちがこれらの変化と新しい能力を探究できる安全空間を提供します。特にピアグループは若者特有のエネルギーである情熱を治療的前進にうまく利用することを可能にします。参加者はこのワークショップで青年期年齢層の発達課題を学び、青年期グループの設定と実践の基礎を学ぶことができます。

【対象】 学会参加者のみ

※ このワークショップには当日通訳がつきます

応答構成入門

講師 能 幸夫(PAS 心理教育研究所・湘南病院相談室)
伊藤 裕子(PAS 心理教育研究所)
橋本 麻耶(PAS 心理教育研究所)

応答構成とは、クライアントの発言に対するわれわれ臨床家の応答を、時間を止めて、応答ができあがるプロセスを吟味していく訓練です。心理療法・カウンセリングおよび精神看護といった臨床家の訓練は、つねに応答構成に始まり応答構成に終わるといえます。私たちがふだん無意識のうちに応答しているそこにも、この応答プロセスはあります。応答を作り上げていく瞬間には、どのような営みと冒険があるのでしょうか。自分の応答能力を広げていくために、PAS 理論のエッセンスが詰まったこの応答構成訓練とともに体験してみましょう。

【対象】 学会参加者のみ

【定員】 10 名内外

アゴラー災害 PTSD を越える心理療法コミュニティー

呼びかけ人:

橋本 和典(国際基督教大学 准教授 福島復興心理・教育臨床センター代表)
梶谷 真司(東京大学大学院 教授 UTCP センター長)
高田 毅(国際基督教大学高等臨床心理学研究所助手 福島復興心理・教育臨床センター臨床スタッフ)

「アゴラ」とは、2008 年の IADP 松江大会で、紛争やテロが続くグローバル社会における孤立と人間性の喪失危機を越えるグループセラピーとして初めて行われ、大きな反響を得た。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災後は、2012 年の仙台大会、2013 年の郡山大会とつないできている。今回のアゴラは、IADP がバックアップを続ける福島復興心理・教育臨床センターの「心理療法コミュニティー」を市民・専門家向けワークショップとして公開するものである。「心理療法コミュニティー」とは、災害後には誰しも恩恵を受けることができる災害心理療法、あるいはその専門家に親しみながら、心が広がり、元気になり、確かな知識を得ることができると心理教育プログラムと噛み合わせて、見えにくく隠れた災害 PTSD の予防や治癒を果たすためのコミュニティ・ビルディングアプローチである。東日本大震災、熊本地震、これまでのあらゆる天災・人災のメガ災害の当事者・関係者、災害 PTSD に関心のある市民の方、専門家、知識人の参加を呼びかけ、PTSD 予防と治癒のエッセンスを体験的につかむことを目的とする。

【定員】 30 名

予定ワークショップとリーダー

○「身体感覚覚醒のための発声練習」
リーダー：高田 毅

ストレスの反応に回避や麻痺が含まれるため、慢性化すると、ストレスの自覚が難しくなります。そういうときに、症状化や行動化の形でバランスをとることになります。本プログラムは、発声練習を通して、身体感覚を安全に覚醒、覚知することを目的としています。自らのストレスを確認し、セルフケアの基本となる自我のフィードバック機能を高めましょう。

○「哲学対話」
リーダー：梶谷 真司

対話型の哲学とは「共に問い、考え、語り、聞くこと」です。自分たちが考えたい問題について、お互いを否定することなく、自由に語り、問いあうことで一緒に思考を深めていきます。それはお互いを承認し合い、自分とは異なる他者を受け入れ、自分自身を深く理解し受け止めるプロセスでもあります。哲学対話において、考えることを通して自由になる感覚を体験しましょう。

○「パンドラグループ」
リーダー：橋本 和典

「パンドラグループ」とは、心理療法家と作る安全な集団で、普段言いにくい心の底にある思い、感情を思う存分言葉にして心の元気を高めるための、災害中長期の PTSD トリートメントのための集団精神療法です。パンドラの箱をあけ、心の重荷を解放しましょう。そこに本物の希望の力が見えてくるでしょう。

訓練ワークショップ（3 日目）

子どもの心理療法

講師 ラルフ・モーラ（個人開業）

このワークショップでは、子どもの治療に焦点を当てます。そのため2つの主要な焦点の1つは発達です。発達は、たとえば自己と対象関係などを考察するための軸を提供します。焦点の2つ目は、子どもとその環境との相互作用の役割を提示するのに役立つシステム理論にあります。実際に、子どもの治療は子どもの精神的な生活とそれを取り巻き、支え、促進するシステムの両方を知ることに依拠しているとみなされています。理論的理解はメラニー・クライン（Melanie Klein）、ドナルド・ウイニコット（Donald Winnicott）、ハリー・ガントリップ（Harry Guntrip）、その他を含む英国学派の対象関係論によって提供されます。システム論は、私達はすべて、家族システムを含む生活の多様なシステムの一部であり、ルールと儀式的全体システム内にある不適応的な境界やサブシステムが相互作用を支配しているとみなします。私自身はジェイ・ラッピン（Jay Lappin）とチャールズ・フィッシュマン（Charles Fishman）の指導の下で構造的家族療法の訓練を受けました。彼らに加えて、サルバドル・ミニューチン（Salvador Minuchin）、ハリー・アポンテ（Harry Aponte）とブラウリオ・モンタヴォ（Braulio Montalvo）についてお話しします。

※ このワークショップには当日通訳がつきます。

中国老荘思想の危機介入

トレーナー・ケースプレゼンター：

李 江波（皖南医学院附属芜湖市第二人民医院臨床心理科：中国）

劉 曉濱（深圳市薬物解毒センター：中国）

コメンテーター：石井 剛（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

事故、災害、親友の死など避け得ない危機に適切な対応をし、上手く乗り越え、危機によるストレスを解消していけるよう、使いやすく、受け入れられやすい危機介入システムを創ることが重要な課題である。人間には、特有な文化環境を配慮し、文化背景に合う危機介入システムが必要である。中国人に深く影響を与えている道家（老子、荘子）思想の最高の境地である「想得開」、'どんなことがあっても、心が広く、崩れない'ということが、危機介入システムの重要な目標と考えている。本ワークショップでは老荘思想を取り入れた、実際の危機介入ケースを検討する。

キャンパスにおける危機介入

トレーナー：橋本 和典（国際基督教大学）

李 樺（中山大学心理健康教育カウンセリングセンター主任：中国）

青年期の発達の節目節目に危機がある。しかし、危機にこそその自我発達を促進しようとする逞しいキャンパスの影は薄い。急激なやる気の途切れによる授業ドロップアウト等の小さな危機対応はもとより、自殺、自傷、非社会・反社会的行動化への危機介入もあまりに脆弱である。その危機介入のなさの背景要因には、教職員や学校組織の危機認識の回避の問題が深く横たわる。本ワークショップでは、実際の事例を使って、危機における個人と組織の力動分析とそれに基づく介入技法を学ぶことを目的とする。また、危機介入に欠かせない個人と組織トラウマの査定法についても触れる。大学のみならず、学校事故による危機が絶えない中学、高等学校、専修学校のメンタルヘルス専門家の参加も歓迎する。

※ このワークショップには当日通訳がつきます。

精神病の集団精神療法

トレーナー：吉松 和哉（式場病院）

「精神病の集団精神療法」では統合失調症を中心とする精神障害者が対象で小グループ、しかも SST や認知行動療法的ではない精神力動的なそれを考えている。このワークショップでは、適応となる対象患者、治療構造、治療技法、治療目標などを実地体験に近い形で学ぶことを狙っている。対象患者は神経症圏や人格障害の患者と違い、自我の脆弱性が目立つが、それは自我境界が曖昧で、些細なストレスが自我侵襲的になりやすいことを意味する。故にこの治療の目標とは自我強化をはかることで、その具体像の体験を期待する。

【定員】10 名内外

現代の青年期危機を考える

トレーナー：牛島 定信（三田精神療法研究所）

スタンレー・ホールが「青年期」adolescence を提唱したのが 1904 年、E R・エリクソンが自我同一性 ego identity という概念を提唱して新しい青年期像を描いてみせたのが 1959 年である。そして、21 世紀になった現在、青年期は再び姿かたちを変えてきているかにみえる。ことに、同世代関係の様相が一変し、イジメが必発になったとしか言いようがない状況を呈しているのだ。心底は「死にたい」気持ちに彩られている。ワークショップ前半は現在の青年期心性を論じ、後半はケースを通じた議論が進めばと思っている。

危機介入ワークショップ

トレーナー：小谷 英文（PAS 心理教育研究所）

不安は、危機すなわち死の脅かしの信号であり、適切な対処を待つ危機からのリトリート状態を表すものである。対処がなければ、隠された脅威が心的エントロピィを高め、緩やかに自己破壊の形を取って死に向かう。慢性うつ、引きこもり、同一性拡散、自己破壊性障害、強迫性障害、不安障害が長期にわたっている患者／クライアント群は、基本的に陰性治療反応（NTR）の慢性化が生じている。彼らの慢性的不安や反復症状の奥に死の脅威に対する危機介入の求めがある。これに応える心理療法の実践技法とその訓練法を学ぶ。

【条件】A4 用紙上半分に自験例概要、下半分に困難面接場面逐語を記載し持参。

【定員】20 名

事例研究発表・事例スーパーヴィジョン 発表者募集

会場・アクセス

本大会では、事例研究発表、および事例スーパーヴィジョンを行う枠があります。

- 1) 事例研究発表：11月5日（土）9:30 ～ 11:30
- 2) 事例スーパーヴィジョン：11月6日（日）10:00 ～ 12:00

1) 「事例研究発表」について

下記の領域について、1 領域 3 名、5 領域 15 名の発表者を募集しています。事例研究発表を目的とします。発表者の持ち時間は 30 分（25 分発表、5 分ディスカッション）です。以下のいずれかをテーマにする事例研究発表を歓迎します。ご発表される領域は学会事務局で決定致します。

テーマ：幼児・児童・思春期・青年期・学生相談・リサーチ・哲学・発達・アイデンティティ・精神看護・力動的看護面接・セルフケア・病院臨床・精神病・人格障害・トラウマ・PTSD 等

座 長：足立智昭・宇佐美しおり・能幸夫・橋本和典 他

2) 「事例スーパーヴィジョン」について

国内・海外の著名セラピストからスーパーヴィジョンを受けたい方を募集します。時間は 2 時間で 1 事例の呈示となります。発表は日本語もしくは英語のいずれかとなります。海外のセラピストからスーパーヴィジョンを受けたい場合には、英語での発表を歓迎します。セス・アロンソン先生、ラルフ・モーラ先生のスーパーヴィジョンの際は通訳がつくため、発表は日本語でも行うことができます。ただし、発表要旨は英語で作成してください。英語での発表原稿の作成に関してご心配な点がございましたら、お申し込みの際に大会事務局にご相談ください。

- 領域：
- ① 吉松 和哉（式場病院） 集団精神療法・精神病の事例
 - ② 牛島 定信（三田精神療法研究所） 思春期・青年期・人格障害の事例
 - ③ ラルフ・モーラ（個人開業） 子どもの虐待、PTSD の事例
 - ④ セス・アロンソン（ウィリアム・アランソン・ホワイト研究所） 思春期・青年期の事例
 - ⑤ 能 幸夫（PAS 心理教育研究所） 病院臨床・リエゾンの事例
 - ⑥ 橋本 和典（国際基督教大学） 困難患者の事例

特に、以下のいずれかをキーワードとする事例を歓迎いたします。

キーワード：力動的心理療法／集団精神療法／思春期・青年期／児童／家族／トラウマ／虐待／PTSD／人格障害／うつ／ひきこもり／精神看護／リエゾン精神看護

申込手続

事例研究発表、および事例スーパーヴィジョンの希望者は、発表希望の旨を申込書にご記入ください。こちらより発表要旨要項をお送りしますので、ご記入いただき、郵送またはメールにて事務局に提出していただきます。提出期限は 2016 年 8 月 31 日（水）です。選定委員会が発表要旨の審査を行い、発表の可否を 2016 年 9 月 9 日（金）までにご連絡いたします。

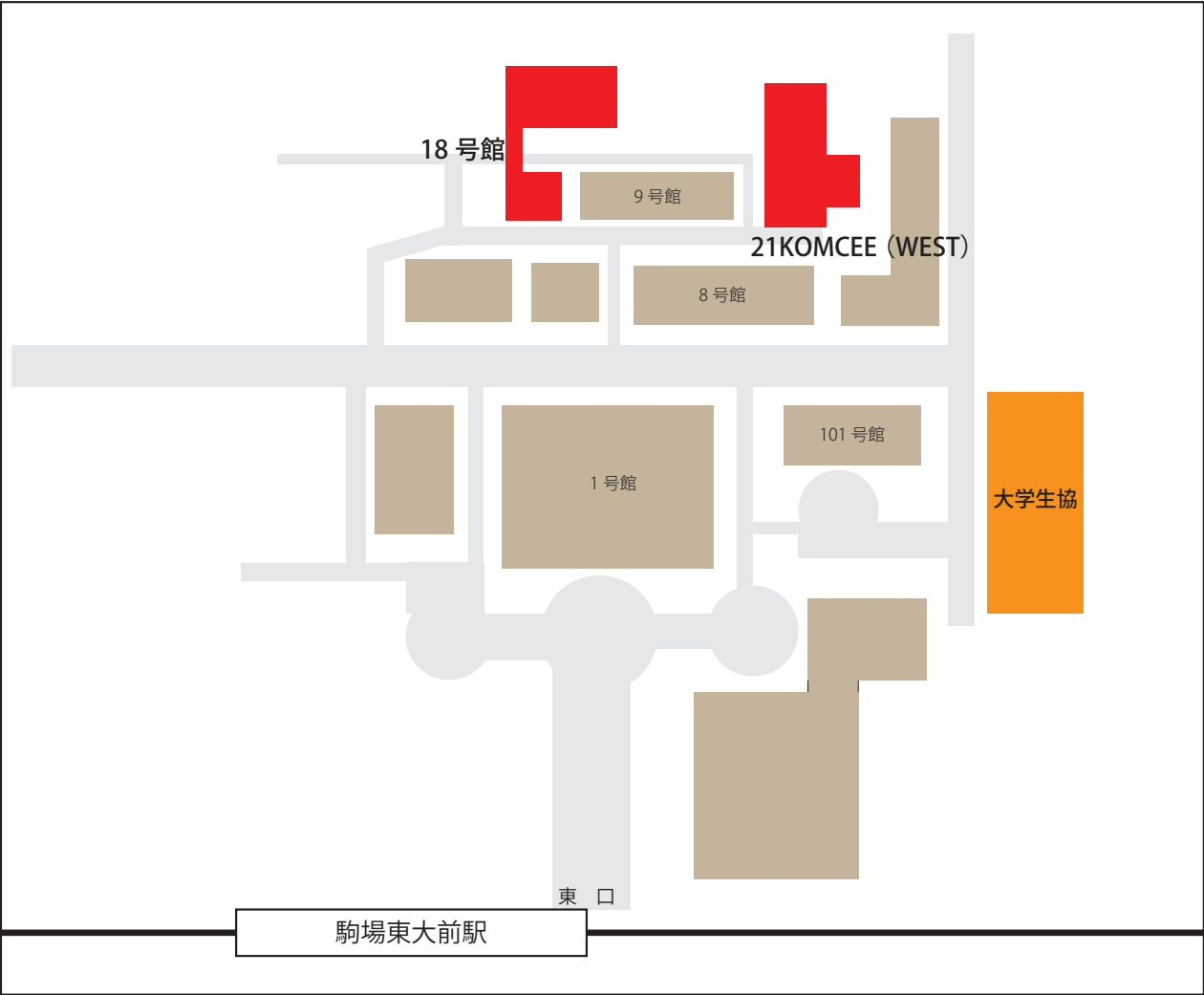
11月3日（祝・木）、5日（土）、6日（日）（大会 1、3、4 日目）

大会会場

東京大学駒場キャンパス 18 号館・21KOMCEE
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

最寄り駅

京王井の頭線 駒場東大前駅下車 徒歩 3 分



会場マップ

会場・アクセス

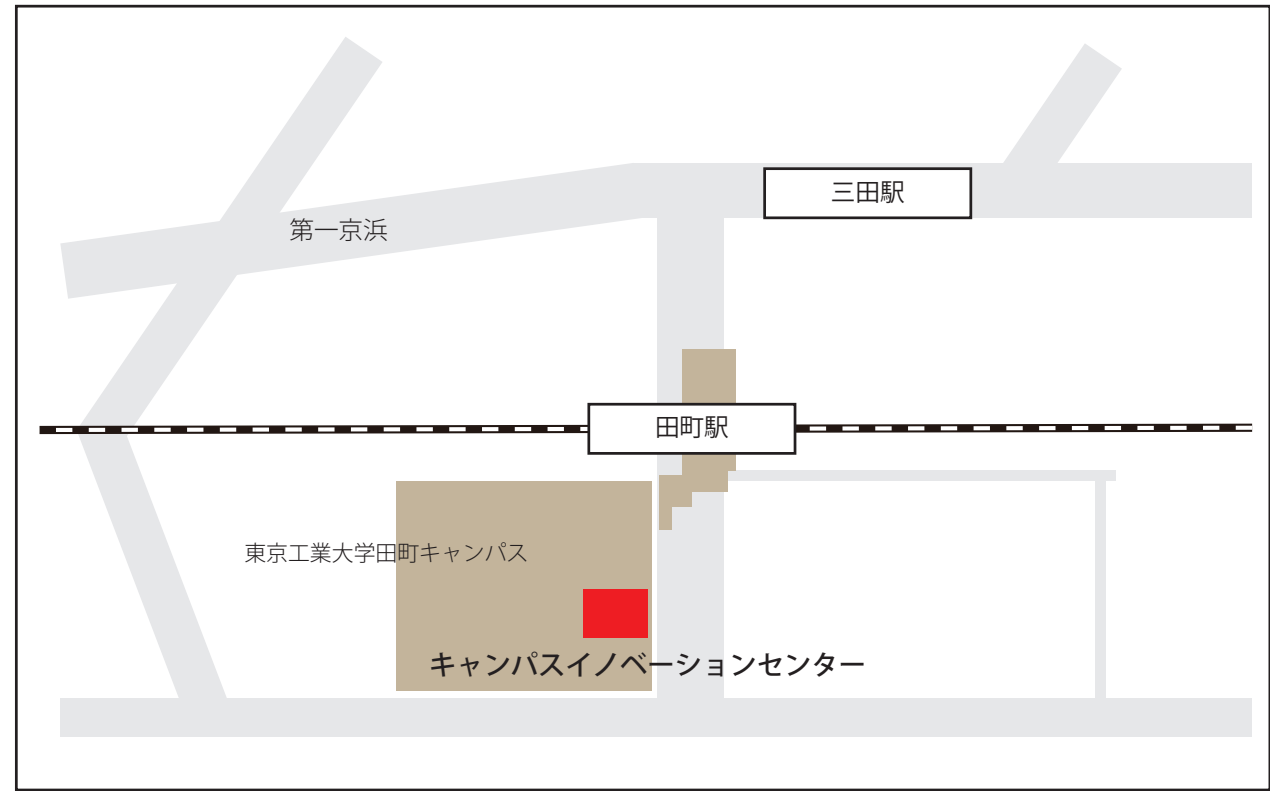
11月4日（金）（大会2日目）

大会会場

東京工業大学（田町キャンパス）キャンパスイノベーションセンター
〒108-0023 東京都港区芝浦 3-3-6

最寄り駅

JR 山手線・京浜東北線 田町駅下車 徒歩1分
都営地下鉄浅草線・三田線 三田駅 徒歩5分



会場マップ

※ 11月4日（金）は、会場が他の日と異なりますので、ご注意ください

大会事務局からのお知らせ

大会参加手続き

申込書にご記入の上、E-mail または FAX で大会事務局（下記参照）までお申込みください。申込書は、国際力動的心理療法学会 (IADP) ホームページからダウンロードできます。

IADP ホームページ：http://www.iadp.info/
参加申込み締切り：9月30日（金）

参加費

会員：	14,000 円
非会員：	17,000 円
学生（大学院生を含む）：	12,000 円
懇親会費：	4,500 円

第 22 回年次大会 大会組織

大会会長 ----- 橋本 和典（国際基督教大学准教授）
大会副会長 --- 中島 隆博（東京大学東洋文化研究所教授）

学術委員会

委員長 ----	中村 有希（PAS 心理教育研究所）
委員 -----	梶谷 真司（東京大学大学院総合文化研究科教授）
	宇佐美 しおり（熊本大学大学院生命科学研究部精神看護学教授）
	足立 智昭（宮城学院女子大学発達臨床学科教授）
	石井 剛（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

大会事務局：PAS 心理教育研究所

事務局長 -----	花井 俊紀
会計 -----	南 貞雅
広報 -----	吉田 愛
	雨宮 基博
受付 -----	植松 晃子
	山下 由紀子
会場 -----	高田 毅
	石川 与志也
渉外 -----	伊藤 裕子
抄録 -----	荻本 快
通訳・翻訳 ----	橋本 麻耶
	髭 香代子

大会事務局

国際力動的心理療法学会 第 22 回年次大会
事務局長：花井 俊紀 (PAS 心理教育研究所)
大会事務局：〒153-0041 東京都目黒区駒場 2-8-9
PAS 心理教育研究所内
TEL & FAX：03-6407-8201
学会ホームページ：<http://www.iadp.info/>
メールアドレス：iadp@iadp.info

表紙の写真：

A ding, Late Shang Dynasty, Shanghai Museum, by Mountain

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Liu_Ding.jpg より掲載